

日記における信仰をめぐる思索の フィクション性について

鈴木 祐丞

序

これまで、キェルケゴールの日記を資料として用いて、キェルケゴール自身の信仰とはどのようなものであったか、解明を試みてきた。今後は、その研究で得られた知見をベースに、新たな研究へと進みたいと考えている。ところで、キェルケゴールの日記にはフィクションが混入しており、それを研究で用いる際には何からの判断が必要とされることは、キェルケゴール研究者の共通認識であると思われる。実は、これまで日記を用いてキェルケゴールの信仰のあり方について研究を進めてきたわけだが、日記のフィクション性というこの問題については、棚上げしたままになっていた。そこで、本稿では、これまでの研究から新しい研究へと歩を進めるにあたっての必要な中継点として、キェルケゴールの日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について、考察を行いたい。すなわち、日記における信仰をめぐる思索にはフィクションが混入しているのか否か、そうであるとすれば、そのフィクションはどのような性質のものであり、日記における信仰をめぐる思索についての知見は今後(どのような仕方)で)研究に用いられるべきだろうか。

以下では、日記における信仰をめぐる思索の全体像を素描するところから始めたい(第1章)。その上で、そのフィクション性についての考察へと移り、まず、日記をめぐる研究史を顧みつつ、フェンガー(Henning Fenger)によって示された日記観(従来の日記観)を見る(第2章第1節)。その後、ガルフ(Joakim Garff)によって示された日記観(新しい日記観)を確認する(第2章第2節)。そして、本稿が問題とする信仰をめぐる思索にはフィクションが混入していること、そのフィクション性はフェンガー的日記観ではなくガルフ

的日記観のもとで解釈されることが妥当であることを示したい（第2章第3節）。これらの論述を踏まえて、最後に、今後の研究の展望を探ってみたい（結び）。

1 日記における信仰をめぐる思索

キェルケゴールは、1848年の4月中旬から初夏（6月下旬から7月上旬ころ）にかけて、自分自身の信仰のあり方をめぐって思索を深め、その内容をおそらくほぼリアルタイムで日記に書き綴っている。彼は、これまでの自分自身の生を振り返りつつ、今後の生において自分自身が体現すべき信仰のあり方を模索し、ある一つの確信へと至るのである。本稿では、この時期の彼の日記（SKS 20, 357, NB4: 152からSKS 20, 402, NB5: 72まで）の内容を、「日記における信仰をめぐる思索」と呼ぶことにしたい。

本稿次章以降でその思索のフィクション性について考察するわけだが、ここで、その考察に備えて、これまでの研究によって解明を得たその思索の内容を略述しておきたい*1。

キェルケゴールは、父により幼少時から施された厳格な宗教教育に起因して、「直接性」なしに「反省」的に生を始めざるを得なかった。すなわち、彼は、幼い子どもの時分から、何の憂いもなく時間的な物事を全面的に享受して生きること（直接性）を不可能とされ、むしろ、永遠の幸いについてたえず思いを巡らしてこの時間的な生を生きること（反省）を強いられたのである。こうした生の来歴ゆえに、キェルケゴールは、1848年までの時期、キリストによる罪の赦しを受けて時間的な物事を全面的に享受する「反省のあとの直接性」という内面性に憧れ、そこに理想的な信仰の境地を見たのである。レギーネ・オルセンとの婚約とその破棄という出来事は、彼が、「反省のあとの直接性」に憧れつつも、そうした信仰を体現できなかったことを示しているわけである。さて、キェルケゴールは、1848年に至って、「反省のあとの直接性」の自

*1 以下の内容について、詳細は拙著『キェルケゴールの信仰と哲学』（ミネルヴァ書房、2014年）参照のこと。また、信仰のあり方をめぐるキェルケゴールの生のドラマを、彼自身の日記の言葉によって浮かび上がらせた、拙訳・編・解説『キェルケゴールの日記』（講談社、2016年）も、併せて参照されたい。

身にとっての不可能性をはっきりと認識するに至るのである。キェルケゴールは、同年、それまで彼が願ひ求めてきた「反省のあとの直接性」としてのキリスト教信仰を、むしろ旧約聖書的、異教的なものとして認識するようになり、この世におけるの苦しみを基調とする「キリストとの同時性」という生のあり方こそ、理想的、新約聖書的、本来的なキリスト教の信仰なのだとして認識するようになるのである。そして、キェルケゴールは、時を同じくして、そうした「キリストとの同時性」という理想的な信仰に対して自らが実際にどのような仕方に関わるべきかについて思い悩み、自分自身は、使徒のように「キリストとの同時性」を実際に体現するべきではなく、むしろ信仰を「自己への無限の関心」という仕方では体現すべきであることを、認識するようになるのである。そのキェルケゴール自身が体現すべき「自己への無限の関心」としての信仰とは何かと言うと、自分に向けられている神意とは何かについて絶対的な確信を有しえない普通の（非使徒的）人間の、それでも神意を尋ね求めようとする絶えざる生の営みの中に表現されるものとしての信仰のことである。そしてまた、キェルケゴールは、1848年のこの時期に、自らのそれまでの生が実は知らず知らずのうちにこの「自己への無限の関心」という信仰を体現していたのだということに気づくようになり、それに伴い、自らの生のうちに絶えず働いている神の導き（摂理）を見出すようになるのである。そして、彼は、「キリストとの同時性」としての信仰を見失っている（と彼の目には映った）同時代のデンマークのキリスト教のあり方を正すことに、爾後の生の課題を、「自己への無限の関心」としての信仰の具現を、見出すに至るのである。

2 日記における信仰をめぐる思索のフィクション性についての考察

以上が、これまで進めてきた研究によって得られた、日記における信仰をめぐる思索についての知見である。

さて、先述の通り、キェルケゴールの日記にフィクションが混入していることは研究者間で当然視されており、上掲の日記における信仰をめぐる思索についても、フィクション性という問題が付随するわけである。今後は信仰をめぐ

る思索についてのこうした知見を出発点としてケルケゴールという思想家を捉え直してみたいと考えているのだが、その前に、出発点となる足場をしっかりと固めておく必要がある。そこで、以下では、日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について、先に示して手順で、考察を加えてみたい。

(1) 従来の日記観（フェンガー的日記観）

まず、日記をめぐる研究史を顧みつつ、フェンガーによって示された日記観（従来の日記観）を見てみよう。

ケルケゴール研究の黎明期においては、(日記をその主要部とする) 遺稿を活用しての、ケルケゴールという人物の伝記的研究が、ケルケゴール研究の主流の一つであり、こうした潮流は20世紀中ごろまでつづいた。だが、『遺稿集』第1版 (EP) *2および第2版 (Pap.) *3において、編集者が恣意的に遺稿を編集し、その結果ケルケゴール自身が整えていた遺稿の状態が読者の目から隠されてしまっていたことを一因として、遺稿は次第に研究の資料から外されるようになった*4。

こうした流れの中で、1976年に出版された書*5の中で、フェンガーは、ケルケゴールの日記はフィクションにまみれておりそれゆえ信頼に値する研究資料たりえない、という日記観を提示した。フェンガーによれば、例えば、ケ

*2 Af S. Kierkegaards Efterladte Papirer, udg. af H. P. Barfod og H. Gottsched, bd. I-X, København: C. A. Reitzels Forlag 1869-1881.

*3 Søren Kierkegaards Papirer, bd. I-XI,3 udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, København: Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag 1909-1948; Anden forøgede Udgave, bd. I-XI,3, ved Niels Thulstrup, bd. XII-XIII (supplementsbind), udg. af Niels Thulstrup, bd. XIV-XVI Index af Niels Jørgen Cappelørn, København: Gyldendal 1968-78.

*4 この段落の内容は、カペロン (Niels Jørgen Cappelørn) らの見解に従っている。Hermann Deuser and Niels Jørgen Cappelørn, "Perspectives in Kierkegaard Research" (tr. by James Pawelski, in *Kierkegaard Studies Yearbook*, 1996, p. 5) および Niels Jørgen Cappelørn, "Preface" (in *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2003, p. VI) 参照。なお、以前の『遺稿集』との対比における最新版原典全集 (SKS) の意義については、拙著「ケルケゴールの新版原典全集 (SKS) の特徴と意義について」(『名古屋商科大学論集』、第58巻第2号、pp. 167-174、2014年) 参照のこと。

*5 Henning Fenger, *Kierkegaard-Myter og Kierkegaard-Kilder*, Odense: Odense Universitetsforlag, 1976.

ルケゴールが1849年に回顧的に日記に書き綴ったレギーネとの関係についての記述『『彼女』に対する私の関係 少し詩的に』*6には、ふんだんにフィクションが紛れ込んでいる*7。フェンガーは、こうした諸例を集積しつつ、キェルケゴールの日記全体（すなわち、「AA」から「KK」の表題を持つ日記帳と、「NB」から「NB36」の表題を持つ日記帳）の内容について「根本的な不信」を表明するに至り*8、「キェルケゴールは、うんざりするようなたゆみなさへと読者を迷い入れる、無作法な神話づくり」だと非難するに至っている*9。

このフェンガー的日記観は、次第に研究者間で共有されるようになり、後述するガルフ的日記観が現れる2000年頃までのキェルケゴール研究の傾向の形成に一役買ったものと考えられる。2003年版の『キェルケゴール研究年鑑』(*Kierkegaard Studies Yearbook*)の序文におけるカペローン(Niels Jørgen Cappelørn)の言葉を借りてこのあたりの事情をまとめてみると、日記は、「キェルケゴール・コーパスのうち、莫大でありながら、悪しく無視されてきた資料」であり、「多くのキェルケゴール研究者は、伝統的に、[日記をその主要部とする]キェルケゴールの遺稿について拒絶的な見方をしてきており、しばしば、それを、出版された作品に比して、ほとんど、あるいはまったく重要性のないものと見なしてきた。その結果、遺稿は、それ自体のためには、ほとんど研究がなされてこなかった」*10。

(2) 新しい日記観（ガルフ的日記観）

フェンガーによって提唱され研究者間に定着していた従来の日記観に代わる、新しい日記観を提唱した（している）のが、ガルフである。ガルフは、日記を含むさまざまな資料を駆使してキェルケゴールの伝記(SAK)を書き上

*6 SKS 19, 431-445, Not15.

*7 Fenger, 1976, s. 145-170.

*8 Fenger, 1976, s. 20.

*9 Joakim Garff, "What Did I Find? Not My I': On Kierkegaard's Journals and the Pseudonymous Autobiography," tr. by K. Brian Söderquist, *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2003, p.113.

*10 Niels Jørgen Cappelørn, "Preface," *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2003, p. VI.

げ、2000年に出版している*¹¹。彼は、伝記の作成という作業に取り組みつつキェルケゴールの日記とはどのような資料であるかを考察し、1997年と2003年に論文を発表している*¹²。彼の日記観は主にこれら二つの論文に述べられている*¹³。

以下では、従来のフェンガー的日記観と対比させながら、ガルフが提唱する新しい日記観とはどのようなものか、浮かび上がらせてみたい。

ガルフ的日記観を要約的に示しているのは、彼の次の言葉である。「キェルケゴールの日記は、その全体が『仮定法』であり、出来事それ自身とその芸術的再創造とのあいだを絶え間なく揺れ動き続ける…」*¹⁴。すなわち、ガルフの考えでは、キェルケゴールの日記にはフェンガーが指摘するようにフィクションが混入しているものであり、そして、そのフィクションの性質とは、出来事(事実)への脚色であって、言わば芸術的再創造なのである。見方を変えて捉え直せば、ガルフは、日記にフィクションが混入していることを認めるところまではフェンガーと軌を一にしつつ、そこからフェンガーと袂を分かち、フェンガーのように日記という資料をそのフィクション性ゆえにネガティブに捉えようとはせず、日記の孕むフィクション性を言わば彼の生の作品化のための必要な処置として捉えることで、日記という資料をそのフィクション性にもかかわらずポジティブに捉えようとするわけである。

*¹¹ Joakim Garff, SAK. *Søren Aabye Kierkegaard, En Biografi*, København: G. E. C. Gads Forlag, 2000.

*¹² Joakim Garff, “‘To produce was my life’: Problems and Perspectives within the Kierkegaardian Biography,” *Kierkegaard Studies. Monography Series*, 1997, no.1, pp. 75-93. Joakim Garff, “‘What Did I Find? Not My I’: On Kierkegaard’s Journals and the Pseudonymous Autobiography,” tr. by K. Brian Söderquist, *Kierkegaard Studies Yearbook*, 2003, pp. 110-124.

*¹³ SAKの序(s. xvi)や“Formation and the Critique of Culture” (in *The Oxford Handbook of Kierkegaard*, tr. by George Pattison, Oxford: Oxford University Press, 2013, pp. 270-272)にも、ガルフの日記観は部分的に示されている。

*¹⁴ Garff, 1997, p. 81. 同内容の記述が2003年の論文にも見られる。「…キェルケゴールがペンを紙にふれさせるその最初の瞬間から、彼は、その芸術的な表現を彼自身の個人的な表現にするのである。[日記の]諸項目は、ほとんどいつも、その出来事自身と、その芸術的再創造とのあいだを、揺れ動いている」(Garff, 2003, p. 115)。

ガルフは、こうした日記観を論証的に提示しているわけではないのだが、その裏付けとして例えば次のような事例を挙げている。

一つ目は、キェルケゴールが、日記が自分の死後に出版され広く読まれることになることを予期していたことである^{*15}。例えばキェルケゴールは次のような言葉を残している^{*16}。

私の死後、ニールセン教授^{*17}が、私の文学的遺産の全体、手稿、日記などの出版の任にあたってくれるということが、私の願いである…。(1849年の手紙)^{*18}

私の死後日記が出版されることになるなら、それは『士師記』というタイトルを付されるのがよいだろう。(1849年の日記)^{*19}

二つ目は、キェルケゴールが、おそらく死後の出版を見越して、日記に言わば外科的な細工を施していたことである。例えば、彼は、日記の記述に対し、事後的に、消去や書き換えあるいはページ全体を塗りつぶすといった操作を加えているし、さらにはページ全体を切り取るということもしている^{*20}。

ガルフが、日記にはフィクションが混入しているということをフェンガーと共に認めつつも、そこからフェンガーとは袂を分かち、そのフィクション性にもかかわらず日記をポジティブに捉えようとするのはなぜだろうか。ガルフが

^{*15} Garff, 2003, pp. 112-113.

^{*16} 『遺稿集』第1版の編集者バーフォー (H. P. Barfod) によれば、キェルケゴールの死後彼の部屋で発見された遺稿は、きちんと整理されていたという。そこから、バーフォーは、「キェルケゴールは、遺稿がいずれ出版されるだろうと想像していたのみならず、少なくとも日記の大部分については、そうなることを想定していた」と述べる (EP, s. vii)。このことも、キェルケゴールが死後の日記の出版を予期していたことの傍証になりうる。

^{*17} Rasmus Nielsen (1809-1884) はデンマークの哲学者。1841年からコペンハーゲン大学教授。

^{*18} SKS 28, 437, Brev 281.

^{*19} SKS 21, 335, NB10: 158.

^{*20} Garff, 2003, p. 113.

挙げる上掲の事例を手がかりに、ガルフの考えの筋道を推察して代弁すると、次のようになるかもしれない。キェルケゴールは、死後に日記が出版されることを見越して、おそらくそのゆえに、日記に対して外科的な細工を施していた。とすると、フィクションを交えて描写するという彼の日記への言わば内科的な細工も、やはり日記の死後の出版を見越してなされた操作だと考えるのが自然であろう。それゆえ、日記のフィクション性とは、キェルケゴールによる、死後の読者を念頭に置いた、自らの生の芸術的再創造として捉えるのが至当であり、これらを考え合わせれば、彼の日記とは、言わば彼の一つの作品と見なすべきではないか。

ここで、ガルフによるフェンガー批判の言葉を確認し、両者の違いがどこにあるのかを明確にしておこう。ガルフは次のように述べている。「フェンガーは——他の多くの研究者と同じく——『本当の』キェルケゴールに到達することに熱心になるあまり、神話化的なフィクションこそが、キェルケゴールの自己提示の本質をなす特徴でありうるものであり、『本当の』キェルケゴールを示しうるのだ、という可能性を、あらかじめ排除してしまった」*21。つまり、ガルフの見立てでは、フェンガーは、日記の中からフィクションを取り除いたところに浮かび上がるのが「本当の」キェルケゴールだと考え、その姿を捉えるために言わば日記の脱神話化を試み、その末に絶望的な結論に至ったわけである*22。対照的に、ガルフの見地からすると、「本当の」キェルケゴールとは、結局のところ、キェルケゴールという一筋縄ではゆかない人間の全貌のことであるはずであり、とすれば、彼が後世の読者を念頭にフィクションを交えて日記に描き出した彼自身の姿も、当然その一端であるはずなのである*23。付言しておく、ガルフが彼の意味での「本当の」キェルケゴールを浮かび上がらせようと試みたのがSAKであり、ガルフは、同書で、キェルケゴールの著作、日記、手紙、様々な文書、それに彼の同時代人による彼についての証言*24な

* 21 Garff, 2003, p. 114.

* 22 Garff, 1997, p. 82.

* 23 1997年の論文にも同趣旨の記述が見られる (Garff, 1997, p. 82)。

* 24 Bruce H. Kirmmse, *Encounters with Kierkegaard*, Princeton: Princeton University Press, 1996.

ど、可能なかぎりあらゆる資料を駆使して、「複合体」*25としてのキェルケゴールの全貌を描き出している*26。

以上がガルフの提示する新しい日記観である。キェルケゴールの日記を彼の作品と見なすこの日記観は、彼の日記は彼の著作と並列的な地位を有するものである、という主張につながるだろう。最新版の原典全集 (SKS) *27において、彼の著作と日記 (を含む遺稿や手紙など) がはじめて一つの全集の中に並列的に収録されたわけだが、このことは、SKSの編集者の一人であったガルフのこうした日記観の反映であるし、ガルフの考えが正しければ、キェルケゴール自身の意に即したことなのである。ガルフの言葉を引用しておこう。「… [伝記的な研究に対する拒絶感というこれまで支配的であった] 観点からすれば、SKSが著作と日記をレイアウトの形態において対等に行っているという事実は、ほとんど挑発も同然だろう。だが、こうした配列は、キェルケゴール自身の指示の敷衍に他ならないのだ」*28。

(3) 信仰をめぐる思索のフィクション性について

それでは、以上を踏まて、本稿の掲げる問いに向き合うことにしよう。日記における信仰をめぐる思索にはフィクションが混入しているのか否か、そうであるとすれば、そのフィクションはどのような性質のものであり、日記における信仰をめぐる思索についての知見は今後 (どのような仕方) で研究に用いられるべきだろうか。

フェンガー的日記観からすれば、日記における信仰をめぐる思索にはフィクションが混入しているはずであり、どこまでが事実でどこからがフィクション

* 25 Garff, SAK, s. xvi.

* 26 Garff, 2003, pp. 117-118.

* 27 *Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-28, K1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, København: Søren Kierkegaard Forskningscenteret og G. E. C. Gads Forlag, 1997-2013.

* 28 Garff, 2003, p. 112. なお、ガルフによれば、その「キェルケゴール自身の指示」とは、本文中にも引用したキェルケゴールによる次の言葉 (1849年の手紙の一節) のことである。「私の死後、ニールセン教授が、私の文学的遺産の全体、手稿、日記などの出版の任にあたってくれるということが、私の意志である」(SKS 28, 437, Brev 281)。

なのかを知る術はなく、その意味でそれは結局のところ信頼に値する知見たりえないのだから、日記における信仰をめぐる思索を研究に活用するのは止めるべきだ、ということになるだろう。ガルフ的日記観からすれば、日記における信仰をめぐる思索にはやはりフィクションが混入しているはずなのだが、そのフィクションとはキェルケゴールが死後の読者を想定して行った自らの生の芸術的再創造なので、日記における信仰をめぐる思索は彼の作品の一環として研究に活用してよいのだ、ということになるだろう。

ここでキェルケゴールの言葉（1849年の日記の一部）に耳を傾けてみよう。

私が自分自身について1848年と49年の日記に書き留めたことの中には、たしかに、やはりしばしば、創造性*²⁹が混ざりこんでいる。そうしたものを追いやっておくことは、わたしのように詩的に創造的である人間にとっては、容易なことではない。私がペンを手にとるその瞬間に、創造性が立ち現れてくる。じつに不思議なことなのだが、自分の心の奥底では、私は、まったく別様であって、自分自身について簡潔だし明確なのである。けれども私がそれを書き留めようとするやいなや、創造性が頭をもたげるのである。宗教的な印象、思考、表現を、私自身が用いるようにして書き留めておこうという欲求が私にないということ、そのこともまた不思議なことである。書き留めておくためには、それらは、いわば、重要すぎるのだ。…こうした言葉の一つが、いわば、使い果たされるときにはじめて、それを書き留めようとして私は思いつきうるのであり、あるいは、それは創造性と混ざり合いうるのである。*³⁰

キェルケゴールは、彼が1848年と49年の日記に書き留めたことの中に、創造性が混ざりこんでいることを吐露しているわけである。その真意は、キェルケゴールが、何度も繰り返して考え抜き、そうして使い果たした宗教的印象、思

*²⁹ 原語は“et Produktivt”であり、SKSの注によればその意は「詩作のきらめき」である。

*³⁰ SKS 21 335, NB10: 158.

考、表現（など）を、創造性によって脚色を施して、1848年から49年の日記の中に描き出した、ということであろう。日記における信仰をめぐる思索とは、まさにキェルケゴールが考え抜き使い果たした宗教的思考などが言語化されたものだったわけで、「創造性が混ざりこんでいる」とここで言われている1848年と49年の日記に、信仰をめぐる思索も含まれていると考えることは、的外れなことではないだろう。つまり、日記における信仰をめぐる思索にはフィクションが混入しており、その性質とは、彼の生の芸術的再創造であって、それゆえガルフ的日記観の示すフィクション性なのである。

もちろん、このことを認めた上でも、信仰をめぐる思索にフェンガー的日記観を適用しそれをネガティブに捉えることは可能である。つまり、信仰をめぐる思索には芸術的再創造とはいえやはりフィクションが混入していることは確かだし、（フェンガー的な意味での）「本当の」キェルケゴールを浮かび上げさせるために事実とフィクションを選り分けることは困難なので、やはり信仰をめぐる思索は無視すべきだ、という風に。けれども、ひとたびそのフィクション性をガルフ的日記観の示すものとして、つまり彼の生の芸術的再創造として認識したならば、むしろ信仰をめぐる思索をポジティブに捉えようとしなないことのほうが、不自然なことであり説明を要することなのではないだろうか。つまり、キェルケゴールが日記に自らの信仰のあり方をフィクションを交えつつ描き出したのは、日記の死後の出版を見越してのことであろうし、そうであるなら、その描写を——彼の著作と同列的な——彼の作品の一端として受け取ることは、彼自身の意に即したことなのではないだろうか。

結び

以上、本稿では、日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について考えてきた。日記における信仰をめぐる思索のフィクション性は、ガルフ的日記観のもとで解釈されることが妥当であり、それゆえその思索は今後の研究において活用されることが妥当であると考えられることを示した。すなわち、日記における信仰をめぐる思索のフィクション性とは彼の生の芸術的再創造なのであり、それゆえその思索は言わば彼の作品の一端として解されるべきだ、と

いうことである。

さて、最後に考えてみたいのは、日記における信仰をめぐる思索をキェルケゴールの作品の一端と見なすとき、どのような研究の方向性が浮かび上がってくるか、という点である。

拙著『キェルケゴールの信仰と哲学』の中では、1848年ころを境とするキェルケゴールの著作における思想的変化（「反省のあとの直接性」としての理想的信仰観から「キリストとの同時性」としての理想的信仰観への変化^{*31}）の背景に、彼自身の生の現場における信仰観の変化があったことを論じ、その信仰観の変化の記録にあたるのが日記における信仰をめぐる思索であったものと考えた。実は、この際、日記における信仰をめぐる思索を彼の作品の一端として見なそうという、本稿の考察を経てたどり着いた考え方は希薄であり、いくぶんナイーブにその思索の内容をキェルケゴール自身に帰したわけである。本稿での考察が示唆するのは、日記における信仰をめぐる思索は、さらに言えばレギーネに関する記述（「『彼女』に対する私の関係 少し詩的に」）なども含めた日記全体の中の彼自身の信仰にかかわる思索は、徹底して一つの作品として捉え直されねばならない、ということだろう。すなわち、キェルケゴールは、「いかにしてキリスト者となるか」という問いと、作家として、また一キリスト者として向き合い、その思索の果実を、著作と日記という二つの系列の作品群を通じて、（総合的に）表現したのではないか、ということである。今後、こうした見通しのもと、研究を進めてゆきたいと考えている。

*31 なお、キェルケゴールの著作の思想にこうした変化が見られることを指摘したのは、橋本淳（『キェルケゴールにおける「苦悩」の世界』、未来社、1976年）である（拙著『キェルケゴールの信仰と哲学』pp. 17-20 参照）。